

論 文

「英米文学概論（含文学史）」授業評価アンケートに表れる学生の声

物語を通して伝わる知的好奇心と道徳観

Teaching English and American Literature:

How to Stimulate Students' Curiosity?

長谷川千春

Chiharu HASEGAWA

Key words : イギリス文学授業, アメリカ文学授業, 文学教育, 学生アンケート, 道徳

This paper explores methods of teaching English and American literature that prompt an effective immersion of the students in the discipline. According to the questionnaire taken in 2015 in the class entitled 'Outline of British and American Literature (Including The History of Literature)', some students professed that they were able to better understand the literary works as a result of the teacher being enthusiastic in his exploration of them. This suggests that, in teaching literature, students are sensitive to the manner through which tutors engage in the explanation of the contents of the literary works. Although it is difficult for tutors to adapt to every single student's needs in their Literature classes, teaching literature enables undergraduate level students to recognise the importance of moral and ethics.

はじめに

大学における文学の授業はきわめて重要であり、学生を教育する上で必要不可欠である。しかし、どのように文学を教えるかというのは、授業を構成する段階においても、実際の授業運営でも難しい。たとえば、膨大な作品数のある英米文学作品のどの作品をどのように教えるのか、また一つの作品を授業で扱う際の時間配分をどのようにするか、など考えなければならない問題は多い。このような状況の中、多くの英米文学研究者は、大学の授業で英米文学をどのように教えるかということを考え

続けている。その一つの例として、日本英文学会（関東支部）は『教室の英文学』を平成29年（2017年）5月に出版した。この本の中では、英語教育という視点も含め、多種多様な英米文学の具体的な教授法が様々な研究者の視点で示されている。

本論では、このような大学における文学教育の実践方法をより具体的に示唆するために、実際に授業を行った結果、学生からどのようなコメントがあったかについて具体的に紹介しながら、分析を行う。まず、平成27年度（2015年度）に行った「英米文学概論（含文学史）」の授業の概要について説明し、次に具体的な授業内容に関して資料を使用しながら紹介する。その後、授業評価アンケートの結果と自由記述欄のコメントを元に、学生の求める文学概論の授業について考察を加える。さらに、分析結果を踏まえた今後の文学教育の課題や展望についても言及する。

授業について

「英米文学概論（含文学史）」は外国語学部英語学科専門教育科目、自由科目の学科共通科目で、2年次の通年科目であった。¹⁾ 教職課程を取得しようとする学生はこの単位を取得する必要があるため、金曜4限・5限とも26名（計52名）の履修があった。

授業計画としては、前期15回でイギリス文学を、そして後期15回でアメリカ文学と構成した。各授業では、前

1) 再履修で3年次に履修する学生もおり、留学帰国後の5月より、履修登録する4年生の学生もいた。

期後期の初回授業と筆記試験を除き、一回の授業で主要作家の主要作品一つを扱った。具体的な授業スケジュールに関して、以下にウェブシラバスからの抜粋を紹介する：

第1回 (Day 1)	イントロダクション：文学とは？ 英文学とは？ デリー・イーグルトン『文学とは何か』、石塚久郎編『イギリス文学入門』を参照しながら
第2回 (Day 2)	ベオウルフ (8世紀) と古英語期の英雄
第3回 (Day 3)	ジェフリー・チョーサー『カンタベリー物語』(14世紀) と中世の人々
第4回 (Day 4)	トマス・マロリー『アーサー王の死』(15世紀)：伝説と虚構・騎士道の理想と現実
第5回 (Day 5)	ウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』(1597年) と悲劇
第6回 (Day 6)	ジョン・ミルトン『失乐园』(1667年) とキリスト教
第7回 (Day 7)	ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルソー』(1719年) と文明社会からの隔離
第8回 (Day 8)	ジェイン・オースティン『傲慢と偏見』(1813年)：女性にとっての恋愛・結婚・すれ違い
第9回 (Day 9)	メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』(1818年) における人間と怪物
第10回 (Day 10)	チャールズ・ディケンズ『オリバー・ツイスト』(1838年) と貧困
第11回 (Day 11)	ロバート・イス・ステューヴソン『ジル博士とワイト氏』(1896年) と二重人格
第12回 (Day 12)	J. R. R. トールキン『ホビット』(1937年) とファンタジー文学
第13回 (Day 13)	アンソニー・バージェス『時計仕掛けのオレンジ』(1962年) と不良少年
第14回 (Day 14)	カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』(2005年) と現代イギリス
第15回 (Day 15)	前期のまとめ・理解度確認

資料1：前期スケジュール

第16回 (Day 16)	アメリカ文学とは？ 講義部誌一編『アメリカ文学入門』を参照しつつ
第17回 (Day 17)	ワシントン・アーヴィング『スケッチブック』(1819年) と『スリーピー・ホロウ』伝説
第18回 (Day 18)	ジェームズ・フェニモア・クーパー『開拓者』(1823年) と『革靴物語』、フロンティア・スピリッツ・自然と文明
第19回 (Day 19)	ナサニエル・ホーソーン『群文字』(1850年) と妖術
第20回 (Day 20)	ハーマン・メルヴィル『白鯊』(1851年) と神への挑戦
第21回 (Day 21)	マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』(1876年) と少年時代のいたずら
第22回 (Day 22)	ステファン・クレイン『赤い武功章』(1895年) と戦争の現実
第23回 (Day 23)	スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』(1925年)：狂騒の20年代とアメリカナドリーム
第24回 (Day 24)	ジョン・スタインベック『二十日鼠と人間』(1937年)：世界大恐慌、出稼ぎ労働と農場
第25回 (Day 25)	ジャック・ケルアック『路上』(1957年)：酒と女とドラッグとジャズ
第26回 (Day 26)	ケン・Kesey『カフカールの果の上で』(1962年) と精神病院の管理体制への反逆
第27回 (Day 27)	フィリップ・K・ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』(1968年) と人造人間
第28回 (Day 28)	アリス・ウォーカー『カラー・パブル』(1982年) と人種差別
第29回 (Day 29)	コーマック・マッカーシー『ザ・ロード』(2006年) と人類破滅
第30回 (Day 30)	後期のまとめ・理解度確認

資料2：後期スケジュール

さらに、初回授業でグループを5つ決め、授業スケジュールに沿う形で担当の作家・文学作品を決め、レポートを発表する、という活動も取り入れた。

評価の方法としては一番大きい割合が筆記試験で60%、その次にレポート評価20%、そして、実技評価(レポート発表)10%と、平常点評価10%(授業への参加度、講師の質問に対する対応・意欲)とした。

授業の流れについて

初回のオリエンテーションや筆記試験などの例外もあるが、大体は以下のように授業を進めた。パワーポイント等の接続準備をするため、教室には10分前に入り、準備を行う。²⁾ チャイムが鳴り終わると同時にまず、「こんにちは。」と大きな声で挨拶をし、文学に関連させたその時期の導入の話などをする。³⁾ 出席確認をした後、すぐに前回の授業の復習をする。たとえば「前回はどの作家の何をやったでしょう?」「冒頭場面について説明してください。」「作家の生い立ちについて教えてください。」という、質問である。全体に問いかけ、答えが返ってこなかったものに関しては指名する。回答が間違っている、または、時間がかかるようであれば、ヒントや選択肢を出しながら、指名した学生が正当を口に出すまで、問答をする。⁴⁾ ここまで大体10分ほど使用する。

復習の後、パワーポイントスライドのタイトルページに進み、作家・作品・テーマ・時代背景などを簡潔に説明する。ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer) の『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales) であれば、中世と現代の違いについて話をする。たとえば、「中世の人々には、テレビ・ラジオ・携帯電話もなく、現代に比べると娯楽の質が異なっていて、限られた人々

- 2) 授業前のこの時間は、学生同士の会話から様々な声が聞こえるので、早めに教室に入っておくことに様々な利点がある。たとえば、その日の発表担当となっている学生が難しかった部分をクラスメイトと相談している声が聞こえてきたり、関連する文学作品のドラマについて感想を言い合っていたり、などである
- 3) この場面での話の導入も工夫によって、文学という領域への理解に繋げることが可能である。たとえば、雨が降っていたら「雨の日は文学日和です。晴耕雨読という言葉があるように、雨の日は家で本、文学作品を読みましょう。晴れ晴れとした気持ちで物語を読むよりも、異なった感情に気づくことができるかもしれません。」などと言うこともあった。また、「晴れの日も晴れやかな気持ちで物語を読めるので、文学日和ですね。」などと繰り返していたところ、笑いととも「いつも文学日和ですね」という声があった。2年後にキャンパス内で出くわした学生に「先生、今日は何日和ですか?」とこやかに質問された経験もある。このように学生は、授業の導入の話が印象に残り、覚えていることが多いので、授業開始の一言をどのようにするか考えておくのは決して無駄ではない。
- 4) このやり取りの中で、自分があてられるかもしれない感覚とともに、授業への集中を促し、筆記試験に直結する質問でもあるので、指名された学生の中には、驚いて質問を確認する学生もいれば、「ヒントをお願いします」と、講師とのやりとりを楽しみながら、また真剣に講師の質問に答えようとする学生もいた。

だけが本（写本）を読むことができました。さて、それではそのような中世イギリスではどのような物語が描かれたのでしょうか。」というような流れである。このようなタイトルページでの導入を活用し、その授業でどのような時代背景の文学を学ぶのか、また、文学史において扱う作品がどのような位置づけがされているのか、ということを確認した。

タイトルページの説明の後に、授業内容のスライドに移動し、授業で具体的に何をすることを説明する。授業は大きく分けて以下3つで構成した：1. 原文にふれる、2. 作品考察・背景、3. 映像作品鑑賞である。この時に、講師が持参した本（ペーパーバックと翻訳）、そして映像作品（DVD）を紹介し、実際に映像作品に関しては回覧をした。

最初の内容「原文にふれる」に関してはまず、黒板に扱う作品の冒頭のポイントとなる部分、たとえば、「登場人物は？」「誰が何をしている？」などを板書する。その後、板書したポイントを中心に冒頭場面がどのように始まるかに注意して聞くように、と指示し、講師が文学作品の冒頭場面の2-3ページを英語で音読する。そのあと、翻訳の音読も行う。この時、途中から無作為に選んだ学生に本を渡し、続きを音読させる活動も行った。この際、ある程度読んだら近くのクラスメイトに音読を交代しても良い、と伝え、学生が学生を指名し、毎回数人が音読をした。

冒頭のポイントがわかるようなところまで音読ができたなら、講師がスライドを使い、冒頭場面の解説を行う。実際に授業で使用したパワーポイントスライドの一部を以下紹介する：

冒頭

- 馬そりにのった一行
 - テンプル判事と娘エリザベス
 - 運転手アガメムノン
- 鹿狩り
 - テンプル判事の獲物？
 - ナッティ・バンポー？
 - 若者ハンター オリバー？
- オリバーの傷

第18回 ノーバー「探偵小説」

資料3：物語冒頭場面をまとめたスライド

このように簡潔に冒頭場面の重要事項や登場人物の名前などを箇条書きにまとめ、ポイントごとにアニメー

ションで文字を出現させ、ゆっくりと説明をする。登場人物の言動があるのであれば、講師が即興の劇のように、その場面を演じた。資料3にあるように、ジェイムズ・フェニモア・クーパー（James Fenimore Cooper）『開拓者』（*The Pioneers*）の冒頭説明では、馬そりに乗った一行が鹿狩りを行う場面が描かれている。この場面を説明する際、誰がどのような発言をしているかなど、あらかじめ教壇を教室の隅に移動し、広くしておいた黒板前のスペースで、右往左往しながら、冒頭の様子を講師が実際に演じた。ここまでおおよそ授業90分のうち40分ほど使用することが多かった。

冒頭場面の説明の後、担当となっていた学生のレポートの発表へと移る。学生はあらかじめ読んでおいた作品の中で興味深いと感じた部分の引用とその要約、引用前後の状況説明、考察をレポート用紙に記入しておき、それを元に発表する。発表が終わった後はそれぞれのレポートに関して講師がフィードバックを行った。これには大体30分ほどかかる。このレポート用紙は以下のようなものである：

発表レポート1		課題：_____	担当日：_____
学号	学年	学籍番号	氏名
評点 _____ /10			
授業名	グループ番号		
作家・書名	作品・巻次・読んだページ	出版社（題名）	出版年
引用	本文		
要約 (一行で)			
引用前後 状況説明			
作家 考察			
疑問・疑問・意見など			講師印

資料4：レポート用紙

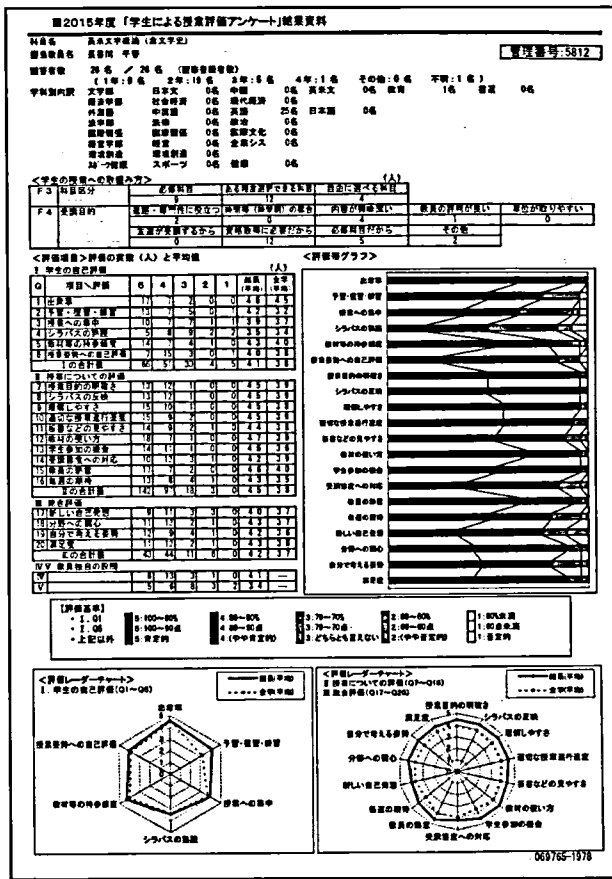
学生の発表が終わった後、作家についての説明を行った。図書館で全員が閲覧できるように指定図書としておいた、三修社の『イギリス文学入門』『アメリカ文学入門』の該当部分を使用し、作家の生い立ち、作品のテー

マ、文学史における作家や作品の位置などを概説した。ここは簡潔に5~10分ほどでまとめている。

授業の終わり10分頃に、該当する文学作品の映像作品を英語字幕があるものは英語字幕に設定し、鑑賞する。ただ単に鑑賞するだけでなく、原作と異なっている部分や、映像化の背景、他の映像化作品との比較なども含め説明し、英米文学作品が映像作品として翻案されることが多く、広く一般社会に流布していることを紹介した。また、筆記試験の映像問題にもつながる鑑賞した部分の場面状況などを説明し、まとめを行った。

授業評価アンケートの結果とその考察

以上のように授業を行い、平成27年(2015年)7月3日金曜日4限の授業終了前に学生評価アンケートが行われた。アンケートは以下のような結果となった：



資料5：授業評価アンケート

まず、「I. 学生の自己評価」に関しては1~2名、授業への集中やシラバスの熟読ができていない学生いたことがわかった。その他に関しては比較的「どちらでもない」~「肯定的」が多かった。次に「II. 授業についての評価」に関して、1名が評価「2」を回答しているが、合計値が4.5ポイントとなった。「III. 総合評価」では合計値が4.2ポイントとなったが、「新しい自己発想」

に3名が「2」を回答しており、文学概論の授業としては不甲斐ない結果となった。「IV. 教員独自の設問」に関しては「IV. 気になる文学作品・映画・引用に出会った」、「V. 卒業までに気になる英米文学作品を一冊読破し、卒業後もそれについて語りたい」という設問を設けており、IVの方では、比較的多くの学生が肯定的であったが、Vに関しては特に大きな差は見られなかった。

以上の選択式アンケートに加え、学生からの自由記述コメントを紹介する：

■2015年度「学生による授業評価アンケート」調査結果(自由記述)

管理番号: 5812

NO.	この授業についての良かった点、改善すべき点、その他意見・要望等
1	自由に読まされていて寝る時間もたっぷり聞こうという気になりました。たくさん英米文学作品に出会って自分の知識が広がりました。とても良い授業になりました。
2	自由記述
3	英米文学は面白いテーマがいろいろある。映画も面白い。
4	授業が面白い。先生の授業が面白い。授業が面白い。授業が面白い。
5	良かった。授業が面白い。授業が面白い。授業が面白い。
6	授業が面白い。授業が面白い。授業が面白い。
7	授業が面白い。授業が面白い。授業が面白い。
8	授業が面白い。授業が面白い。授業が面白い。
9	授業が面白い。授業が面白い。授業が面白い。
10	授業が面白い。授業が面白い。授業が面白い。
11	授業が面白い。授業が面白い。授業が面白い。

資料6：授業評価アンケート自由記述

資料5と、資料6に見られる学生の自由形式のコメントから見える傾向として、まず、学生が多くの文学作品と出会う機会を欲していることが挙げられる。また、ただ単に多くの作品を知るだけではなく、それらを丁寧に読み取り、時には面白く理解したいという気持ちが見られる。文学「概論」の授業であるため、文学知識の基礎を教えるということが必要不可欠である一方、アクティブ・ラーニングの対応なども積極的にしなければならない風潮がある。それゆえ、講師が知識を説明することと、学生が授業参加することのバランスの工夫の重要性にも気づくことができる。

また、「熱心に指導されていて」、「先生がハキハキしているの」などというコメントがあったことから、学生は、教員の指導スタイルや声の質にも注視していることが明らかとなった。学生にとっては自分の興味・専攻とは関係が薄い分野の授業を履修しなければならない状況もあるかもしれない。その中で難しい専門用語や話題となった際には、授業担当者の教える姿勢や声の使い方なども、学生の授業理解の重要な要素となっていることが再確認できた。

さらに、「英米文学は堅苦しいイメージだがこの授業にはユーモアがある」というコメントがあったことから、英米文学作品が学生にとって敷居の高いものであるという認識も見出すことができた。これは同時に、理解の難しい作品を説明する際は、わかりやすく、時には極端に誇張した身体表現や声の抑揚など、「ユーモア」を感じ

させる工夫が求められているように感じられる。ただし、扱う文学作品が単純に面白い物語だ、という安直な解説に陥ってしまわないように、時には難しい問題も絡めながら説明し、文学作品を考察する際の難解さなども気づかせる必要性も認識できた。

「グロイ作品はやめてほしい」⁵⁾というコメントもあったが、この要望に対応するかどうかに関しては判断が難しい。たとえばイギリス文学の中ではメアリー・シェリー (Mary Shelley) 『フランケンシュタイン』 (Frankenstein) の中で死体をつなぎ合わせて創造された怪物の醜さや、カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) 『私を離さないで』 (Never Let Me Go) における臓器提供をするためだけに育てられる子供たちが描かれている。またアメリカ文学でも、ワシントン・アーヴィング (Washington Irving) 『スケッチブック』の中に収録された「スリーピー・ホロウの伝説」 ('The Legend of Sleepy Hollow') では、首のない騎士の幽霊の話、ケン・キージー (Ken Kesey) 『カッコーの巣の上で』 (One Flew Over the Cuckoo's Nest) では精神病患者などが描かれている。事前にどのような作品かわからなければ、学生にとっては日々あまり考えない、あるいは考えたくないことを目の当たりすることになり、目を背けたい場面も出てくるだろう。ただ、文学史に登場し、翻訳としても発売され、映像作品としても登場している作品であれば、その文学作品がある程度世間に広くゆき渡っているという事実もあり、最低限の文学史の知識として知っておかなければいけない事情もある。不快感を催す作品であっても、文学作品として認められている以上、担当の教員が、十分な配慮をしたうえで適切に伝えるという義務があるようにも感じられる。嫌悪感や異質な事物が読者の心理を揺さぶることもあるのが文学たるゆえんでもあることを説明することが肝心であり、また、学生に道徳や倫理を学ぶ機会を与えることが大学の授業で文学を扱うことの意義でもある。

課題と展望

授業評価アンケートの結果や学生のコメントから読み取れる点に関しては、適宜修正を検討していくことができるが、結果から見られない点についても課題点として見ておく必要がある。この授業では、文学の授業で取り入れるべき活動として、テキストを時間をかけてじっく

5) 「グロイ」というのはここでは日本語で言う「グロテスク」が短縮された表現で、怪奇という意味があるが、ここでは不快感を催す不気味さや異様さを表す言葉で使われている。

り読むという活動ができていない。いわゆる英文訳読という活動である。渡辺利雄は、とある学生の英文訳読を紹介し、昨今の学生の英語読解能力の低下の原因を、英語教育の実用英語への偏重に見ている。⁶⁾ 文学テキストの一文一文、一語一語を辞書で調べ、日本語で読めているかどうかを確認する訳読を、授業のスケジュールに組み込むことも可能である。これによって、学生の文学テキストに向かう姿勢を矯正し、作家が文学作品を書く際に使用した一語一語に対する思いを読み取ろうとする能力を培うことができる。

さらに言えば、訳の確認をするだけでなく、たとえば、学生のレポート発表の場で、引用に関しては原文と訳語を発表し、その翻訳に関してクラス内で討論し、また、担当講師が評価するなどの活動にもつなげることができる。さらに言えば、昨今、求められているアクティブ・ラーニングや学生主体の授業の形態に対応するように、訳読をグループ活動化する、などの工夫ができるかもしれない。

しかしながら、文学「概論」の授業であるということも鑑みると、本論文は、原文の訳読に時間をかけすぎて作品全体像について解説できる時間が少なくなることを避けるべきである、という立場をとる。そして、文学概論の授業を経て、学生の興味を文学「研究」や「演習」の授業履修へ誘い、その授業の活動として、じっくりと読むことを授業で経験させ、文学テキストを読む力を付けていくという順序を提唱する。テキスト一語一語の重みを、繰り返し概論の授業で強調することは言うまでもなく重要であり、大前提である。しかし、英米文学の入門の授業においては、文学の世界の興味深さを優先して教えることが先決である、ということをご確認ください。

長尾輝彦は、文学作品を読む際、何が必要なのかということに関して、「ことばの能力、そしてことばによって喚起された観念の世界を維持する集中力・記憶力・空想力、そしてある程度の人生経験、それ以外に何が必要だろう。」と述べている。⁷⁾ 学生のその時点での人生経験でわかること、あるいはわからないことをなるべく早く認識するためにも、まずは文学概論の授業においてはできる限り多くの作品の概略を伝え、その主題や面白

6) 渡辺利雄『英語を学ぶ大学生と教える教師に：これでいいのか英語教育と文学研究』(研究社、2001年) pp. 2-6.

7) 長尾輝彦「文学研究は何のため—(意図の誤謬)、(多義性)、(必読の書)等をめぐって」『英米文学試論集—文学研究は何のため』長尾輝彦編著(北海道大学出版会、2008年) pp. 1-24 (p. 20).

さ・難しさをわかりやすく伝えるという展望を持って授業を構成することが必要不可欠である。

まとめ

本論文では、まず実際に行った「英米文学概論（含文学史）」の内容を確認し、学生の授業評価アンケートとその自由記述コメントを紹介しながら、学生が文学概論の授業で何を望んでいるかについて考察・分析を行った。これらのことから、まず、受講学生の中で考えられていた堅苦しいという先入観のあった英米文学という分野が、面白いという認識に変化した、ということが明らかとなった。さらに、自由記述のコメントから、文学専攻の学生ではないゆえに、イギリス・アメリカ文学作品への知識がなかったこと、学生が拒絶感を催す文学作品があることも読み取ることできた。また、履修学生の中には、多くの作品と出会うことに楽しみを感じ、熱心に授業参加し、レポート発表・提出を行っていたことも読み取ることができた。

イギリス文学とアメリカ文学を「英米文学概論」と一括りに教えるということは、担当者の専門性や授業準備で負担と感じられる一方で、英米文学作品の概略を教え、またその面白みを伝えることは、文学研究経験者の使命であるとも言える。ただ、楽しみや面白みだけでなく、文学を研究するにおいて避けては通れない、いわゆる「精読」・「訳読」の難しさ・複雑さなども同時に説明することも看過することはできない。さらに、時代も違えば言語も異なる国で書かれた文学作品に現れる人物やその言動を理解しようと努めることは、その国の当時の時代背景・政治状況などを知るきっかけとなり、現在生活している環境とは異なった文化を理解しようと試みる姿勢の基礎を構築する良い機会となる。直接的な性的描写、残虐・残酷性など、現実には起こりうる、あるいは現実に起きている物事であるにもかかわらず、「配慮」という形で人目に晒されることが避けられ、過剰に保護されることもある現代社会の学生にとって、異質で刺激の強い場面描写などは、しばしば不愉快な経験となりうる。だがしかし、これを乗り越えたうえで把握することのできる、不条理・背徳・矛盾などは、これから成長し、卒業後に切磋琢磨していくことになる学生にとって知っておくべき人間世界の現実でもある。

以上のように、英米文学概論が、学生の知的好奇心を刺激し、自分で本を読もうとする姿勢を促すきっかけとなり、授業内で作品を考察した結果をクラスメイトと共有するという学生参加型の授業にも応用することが可能

で、課題はあるものの、学生の道德教育にも積極的に関わることができる授業である、ということを確認し、本論文の締めくくりとする。

参考文献

- Chaucer, Geoffrey, *The Canterbury Tales* (London: Penguin, 2005)
- Cooper, James Fenimore, *The Pioneers* (New York: Penguin, 1988)
- Irving, Washington, *The Legend of Sleepy Hollow and Other Stories [The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.]* (New York: Penguin, 1978)
- Ishiguro, Kazuo, *Never Let Me Go* (London: Faber and Faber, 2006)
- Kesey, Ken, *One Flew Over the Cuckoo's Nest* (New York: Penguin, 2003)
- Shelley, Mary, *Frankenstein* (London: Penguin, 2003)
- 石塚久郎編『イギリス文学入門』（三修社、2014年）
- 諏訪部浩一編『アメリカ文学入門』（三修社、2013年）
- 長尾輝彦「文学研究は何のため—〈意図の誤謬〉、〈多義性〉、〈必読の書〉等をめぐって」『英米文学試論集—文学研究は何のため』長尾輝彦編著（北海道大学出版会、2008年）pp. 1-24
- 日本英文学会（関東支部）編『教室の英文学』（研究社、2017年）
- 渡辺利雄「英語を学ぶ大学生と教える教師に：これでいいのか英語教育と文学研究」（研究社、2001年）